

意思疎通的 コミュニケーション力の育成を

岩手大学教育学部教授 田代 高章

今、子ども達は、携帯電話無料アプリのLINEに代表されるようなSNSをめぐるいじめやトラブルを起こしたり、他者に対してすぐにキレる子どもなど、対人的なコミュニケーションに課題を抱える状況が見られます。そこ

では、自分の思いや考えが中心であり、相手が自分の思いや考えに依えてくれない場合には、相手が悪いと腹を立てて相手を攻撃し、対立してしまいうこともあります。

また、少子化や核家族化の中で、兄弟姉妹数も少なく、親子間のふれ合いも必ずしも十分とは言えず、他者との関係を築くことが未だ困難な子ども状況も見られます。

それに対して、これからの社会においては、多様な他者と協力協同し良好な関係を築くことが求められており、相手に対して自分の思いをうまく伝えたり、相手の思いを受け止め理解し合うためにも、

コミュニケーション力が必要であるということがよく言われます。

確かに、グローバル社会とされる現代では、国境を越え、民族や文化や宗教を越えて多様な人々との交流が盛んとなつていますし、経済活動も国を超えて活発化する時代状況です。だからこそ、自分と異なる相手をいかに理解し、いかに自分の考えを的確に伝え、交流できるか、まさにコミュニケーション力の育成が求められていると言えるでしょう。

一般に、「コミュニケーション」という場合、二つの機能を持つとされています。

一つは、情報伝達の機能、つまり、一定の情報をもとに相手に伝えるという機能。もう一つは、意思疎通の機能、つまり、相手と自分の思いや考えを交流し相互に理解し合うという機能です。今では、情報伝達だけでなく、意思疎

通的な側面も含めて、「コミュニケーション」の機能が理解されるようになってきています。

もつとも、情報伝達にしても、意思疎通にしても、相手の存在を前提に成立します。

ただ、情報伝達的コミュニケーションでは、相手がいたとしても、相手の思いや考えとは無関係に、自分の思いだけを一方的に伝えることも生じます。

しかし、意思疎通的コミュニケーションでは、まず、人間としての相手との対等性が前提であり、相手の話しに耳を傾け、しっかり理解すること、相手に応じて自分の思いや考えを伝え合うことが必要になります。

ただ、その場合でも、相手と理解が食い違う、相手に自分の思いや考えがうまく伝わらない場合がありうることも想定しなければなりません。

人間には、それぞれ個性があり、人それぞれに性格や価値観も異なるだけに、そう簡単には理解し合えないでしょうし、わかり合えない場合も多々あります。そのような食い違いは、子ども達相互の間や、子どもと大人の間、また親子同士の間でさえもしばしば起

こりうることです。

意思疎通的コミュニケーションでは、相手と自分との間に思いや考えの解釈のズレや誤解があれば、相手の立場にたつて、相手にも理解されるように、言い方を変える、もつと詳しく説明する、自分の意図が伝わっているか相手に聞き返すなど、お互いの思いや考えを解釈・修正しながら、交流し了解し合い、その上で、互いの納得と合意を創り出すことが重視されます。

このように、意思疎通的コミュニケーションでは、自分の思いだけに拘泥するのではなく、相手を認め、その思いや考えを共感的に受け止め、相手にも合わせながら自分も変わっていくということが含意されており、自分と相手の双方に対して対等な相互承認と共感にもとづく変容を促すという意味で、相互変容的な性質を持つていといえます。

子どもには、生存・発達の権利や保護される権利はもちろんで規定される意見表明権も保障されています。子どもに意思疎通的コミュニケーション力を育むためには、たとえ愛情の現れであったとしても、親として一方的に思い

や考えを押しつけるのではなく、親自身の意識が変わり、子どもを認め、その意見(声)にしつかりと耳を傾けること、そして、子どもの声を共感的に受け止めつつ、対話しながら子どもとの間に納得と合意を創り出すことが大切になつてくるのではないのでしょうか。まずは、親から率先して、子どもの声にしつかりと耳を傾けること、それから子どもとも思いや考えを交流し合うことです。そのような親の態度と行動を通して、子どももまたコミュニケーションのあり方を学び、社会に出たときに必要な意思疎通的コミュニケーション力が育まれていくように思います。

プロフィール

田代 高章 (たしろたかあき)

1961年生まれ。九州大学法学部卒業。広島大学大学院教育学研究科博士課程修了。広島大学助手を経て、岩手大学教育学部講師・助教授・准教授を経て現在に至る。



日本教育方法学会理事。前岩手大学教育学部附属中学校長。